

2013年 秋季企画展

— 教旨制定 100年 —

教旨

早稲田大学は学問の獨立を
 旨とし學問の發展を以て機
 關國武を造就するを以て之
 學の宗旨と爲す

早稲田大学は學問の獨立を
 宗旨と爲すを以て之を自由
 研究を以てし常に獨創の必
 要に力め以て世界の學問に
 裨益せん事を以てす

早稲田大学は學問の發展を
 本旨と爲すを以て等差を學
 理として研究するを以て之
 を實際に展開するの道を以
 て以て時世の進歩に資せん
 事を以てす

早稲田大学は國境國氏の差
 別を以てし爲すを以て之を
 帝國の強良なる國民として
 個性を尊重し國家を發達し
 國家社會を利濟し併せて夜
 く世界に活動せしむる人徳を
 養成せん事を以てす

「大正デモクラシー」期の早稲田

2013年 10月8日(火)～11月4日(月)



【会 場】 早稲田キャンパス 26号館 大隈記念タワー 10階 125 記念室
 【開室時間】 10～18時
 【閉室日】 10月13日(日)・10月27日(日)・10月31日(木)

早稲田大学大学史資料センター (問合せ) TEL 042-451-1343
 (大学史) <http://www.waseda.jp/archives/>
 (文化推進部) <http://www.wasedabunka.jp/>

〒202-0021 東京都西東京市東伏見 3-4-1 東伏見 STEP22



早稲田大学全景

早稲田大学大学史資料センター所蔵

早稲田大学全景の航空写真。関東大震災直前のもの。



早稲田新市街

早稲田大学大学史資料センター所蔵

1910年代の現早大通り。鶴巻町方面から大学を望む。

はじめに

ちょうど100年前の1913(大正2)年10月、早稲田大学は創立30年祝典を挙行し、大隈重信総長は学問の独立、学問の活用、模範国民の造就をうたう早稲田大学教旨を宣言しました。1910年代から1920年代にかけての時代は、「大正デモクラシー」という新しい時代の潮流の中で早稲田大学も新たな発展を模索した時代でした。

本展ではこの教旨が制定された1913年から1920年代にかけての時期の早稲田大学の歴史を大学側、また教員や学生の側から見直し、今日に至る早稲田大学の歴史の一章をご覧いただくものです。「大正デモクラシー」期の早稲田には大隈総長、高田学長のもと個性豊かな教員が授業を行い、いつの時代も早稲田大学の主役である学生が大学生活を送り、早稲田の街の人々があたたかく大学を支えてくれました。今日の早稲田大学と重なる、また異なる「大正デモクラシー」期の早稲田に生きた人々の姿を、展示資料を通して実感していただければ幸いです。

最後に、開催に当って御協力いただきました各位・各箇所に深く感謝申し上げます。

2013年10月

早稲田大学大学史資料センター

1. 教旨制定と大学令による大学へ

1913(大正2)年10月17日、早稲田大学は創立30年祝典を挙行し大隈重信総長は学問の独立、学問の活用、模範国民の造就をうたう早稲田大学教旨を宣言した。教旨は第二次世界大戦後、「立憲帝国の忠良なる臣民として」の字句を削除したが、今日まで早稲田大学の教育の基本精神を示すものとして存続している。教旨の碑は1937(昭和12)年に建立され、今、早稲田大学正門脇にある(字句は大正期の制定当時のまま)。

4 当時の早稲田大学は専門学校令の適用を受ける学校であったが、大学令による大学に昇格すべく、大隈、高田を始め大学関係者は準備に奔走した。1920(大正9)年2月5日、早稲田大学は大学令による大学として認可された。早稲田大学は政治経済学部、法学部、文学部、商学部、理工学部の5学部体制となり、専門部と高等師範部を併置した。従来の高等予科は高等学院に改組された。

1922(大正11)年1月10日、大隈重信総長が逝去し、盛大な国民葬が挙行された。総長には塩沢昌貞を経て高田早苗が就任し、大隈没後の大学経営を担った。そして故大隈総長を記念する事業として、大隈記念講堂の建設が開始され、1927(昭和2)年に竣工した。

【展示資料】



創立30年祝典で演説中の大隈重信総長
早稲田大学大学史資料センター所蔵

『早稲田学報』1913年11月号（祝典記念号）

早稲田大学図書館所蔵

30年祝典の記念号。式典における高田学長の挨拶、渋沢栄一基金管理委員長の祝辞、大隈総長による早稲田大学教旨の宣言、国内外からの祝辞、また記念園遊会や提灯行列の実施といった関連行事の開催が詳細に報じられている。

高田早苗著『半峯昔はなし』早稲田大学出版部 1927年

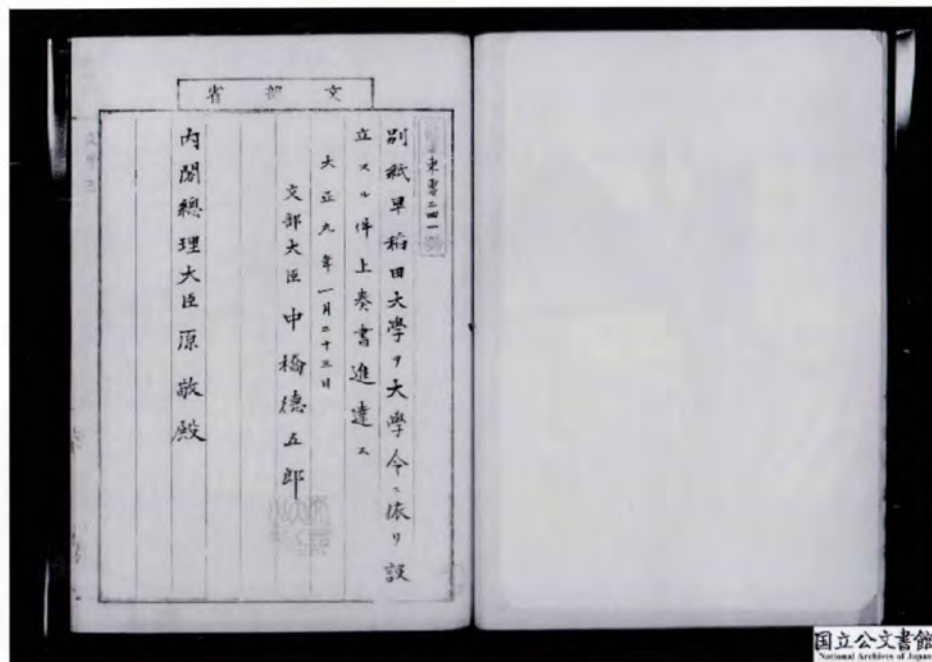
早稲田大学大学史資料センター所蔵

高田早苗による自叙伝。早稲田大学教旨の作成が高田の発案であり、坪内逍遙、天野為之、市島謙吉、浮田和民、松平康国と案文を作成し、大隈総長の閲覧を経て、宣言に至った経緯や、30年祝典の実施、校旗・式服の制定を行ったことが述べられている。

早稲田大学創立三十年祝典記念帖 早稲田大学出版部 1913年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

30年祝典の開催を記念して作られた写真帖。式典の様子、関連行事の写真が豊富に掲載されている。



早稲田大学ヲ大学令ニ依リ設立スルノ件ヲ裁可セラル

『公文類聚』第44編卷24 国立公文書館所蔵（パネルによる展示です）

1920(大正9)年1月23日付。原敬内閣の文部大臣中橋徳五郎による早稲田大学の認可申請上奏公文。翌2月早稲田大学は大学令による大学として認可された。



早稲田高等学院開院式

早稲田大学大学史資料センター所蔵

1920(大正9)年4月25日、高等学院の開院式が挙行された。当日の正門の様子。

『早稲田学報』1920年5月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵

高等学院開院式に関する記事がある。高等学院長中島半次郎が学科編成に柔軟性を持たせるべく「高等学院」と命名したこと、また従来の高等予科以上に高等普通教育を充実させ、また大学の基礎教育を授けるという高等学院設立の趣旨を述べている。高等学院は文科440人、理科160人の一学年600人の体制でスタートした。倍率は文科が約3倍、理科が約6倍であったという。開院式には大隈重信総長、平沼淑郎学長、松浦鎮次郎文部省専門学務局長が祝辞を述べ、来賓として後藤新平等が臨席した。

酒枝義旗『早稲田の森—生ける母校の姿—思い出』

前野書店 1966年 早稲田大学大学史資料センター所蔵

酒枝は早稲田高等学院の第一期生。後に政治経済学部教授となる。本書で創設当時の高等学院、また大正期の政治経済学部に関する貴重な証言をのこした。院長中島半次郎、クラスメイトのこと、大正期の戸山の風景、吉野作造の講演を聞いた思い出等が記されている。

時子山常三郎『早稲田生活半世紀』

早稲田大学出版部 1973年 早稲田大学大学史資料センター所蔵

後に第9代早稲田大学総長となる時子山常三郎は1922年当時高等学院生。本書で大隈の国民葬に関する貴重な証言を残している。



大隈重信国民葬参列者

早稲田大学大学史資料センター所蔵

1922(大正11)年1月10日、大隈重信初代総長が逝去。17日に日比谷公園で「国民葬」が举行され、数十万人とも言われた会葬者が参列した。



1 早稲田大学故大隈総長記念大講堂設計圖 一等位 配景
建築第二課元・河原雄三郎氏 合作

『早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集』 早稲田大学故大隈総長
記念事業部編 1923年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

故大隈総長の記念事業として大隈講堂を建設した際の設計図案集。一等から三等、また佳作一席から六席までの入選図案が掲載されている。今日の大隈講堂の形が決定するまでに多くの図案と可能性があったことを示す貴重な資料である。

『早稲田学報』1922年4月号（故総長大隈侯追悼号）

『大観』1922年2月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵

1922(大正11)年1月10日の大隈総長逝去を受けた『早稲田学報』と『大観』の追悼記念号。『大観』は大隈発刊の総合雑誌として1918(大正7)年5月に創刊。追悼号には三宅雪嶺、徳富蘇峰等が寄稿した。

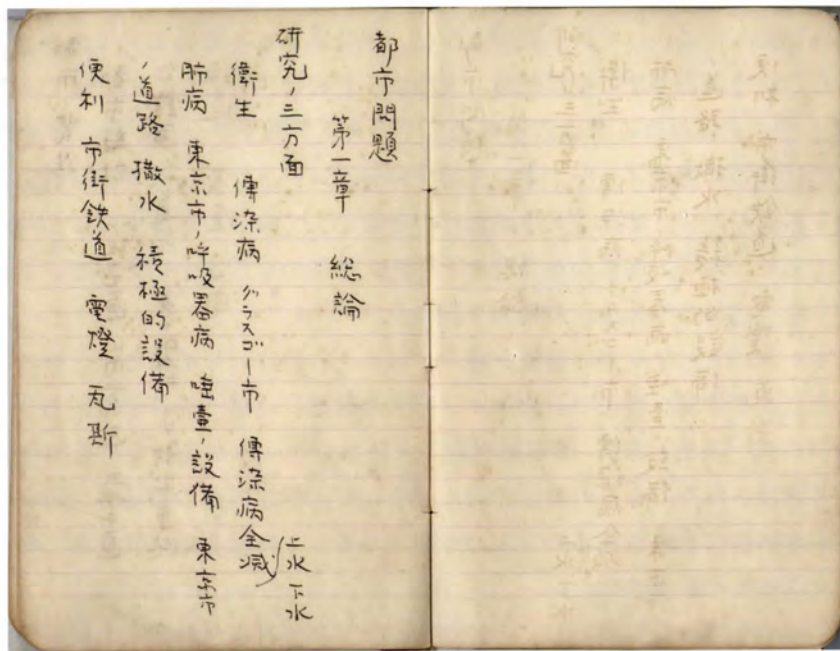
2. 「大正デモクラシー」期の教員と早稲田の街

1910年代から1920年代にかけての早稲田大学は、個性あふれる教員と学生がキャンパスに集った時代であった。政治経済学部の安部磯雄・大山郁夫教授は当時の代表的教員であり、学内の講義のみならずメディアにおける言論活動を通して「大正デモクラシー」期の政治思想の一翼を担った。ここでは彼等の講義ノート、また受講生の受講ノートから、彼等の早稲田大学教員としての授業光景を再現したい。また『人生劇場』の著者として有名な尾崎士郎は当時大学部政治経済学科の学生であり、尾崎の回顧から当時の早稲田大学生の生活をかいまみた。さらに卒業アルバムの写真からも、当時の学生生活の再現を試みた。

この時期はキャンパスと学生街の整備が着々と進んだ。現在の早稲田キャンパスには5学部と高等師範部、第二高等学院、現在の戸山キャンパスの敷地には第一高等学院があり、建物の整備が進んだ。新図書館（現2号館）、演劇博物館、大隈講堂といった現在も早稲田の誇りと言わなければならない施設が着々と建設されたのもこの時期である。そして大学正門前の鶴巻町（現在の早稲田鶴巻町）に学生街が本格的に形成されるのもこの時期である。下宿屋を始め飲食店、喫茶店、古本屋等が集まり一大学生街が形成された。

この時期の早稲田を襲った災害として、1923(大正12)年9月1日の関東大震災がある。本郷の東京帝国大学が受けたような図書館焼失という事態は免れたが、それでも大講堂の倒壊、応用化学教室の全焼という大きな被害を受けた。ここでは写真と一学生がのこした「関東大震災写真帖」から、震災当時の状況の再現を試みた。

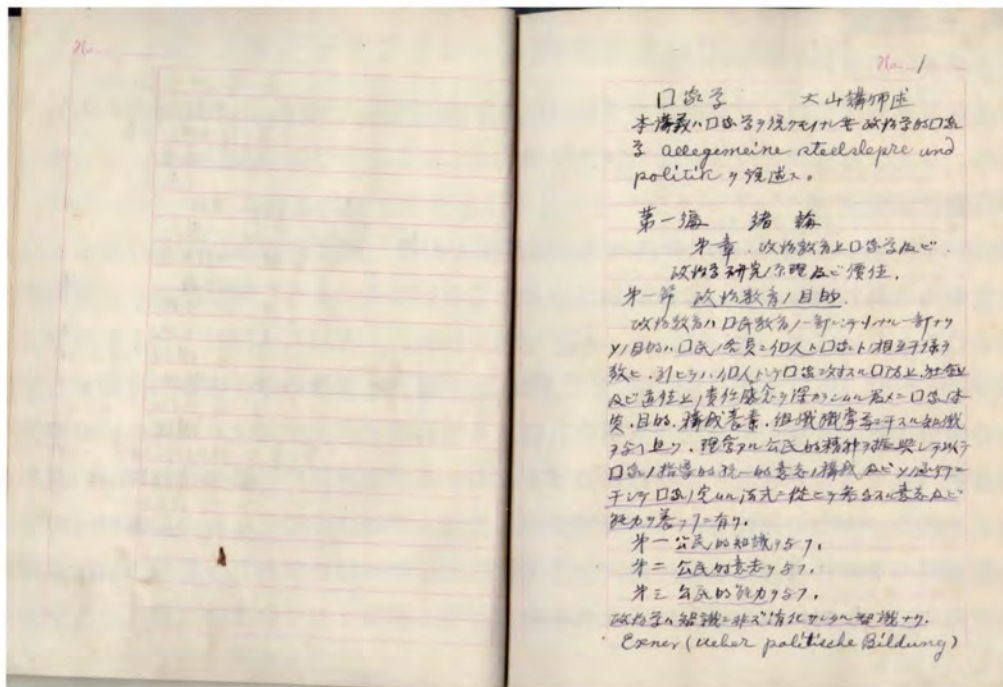
【展示資料】



「都市問題 農村問題」

早稲田大学大学史資料センター所蔵

安部磯雄が大正期の「都市問題」「農村問題」の講義に使用した講義用ノート。



勝田友三郎氏受講ノート 国家原論・帝国憲法

早稲田大学大学史資料センター所蔵

勝田友三郎による大山郁夫の『国家学原理』の受講ノート。100ページ以上に渡る詳細なものがある。

「社会学 社会問題」1920年代

早稲田大学大学史資料センター所蔵

1920年代前半に使用した、安部磯雄の「社会学」「社会問題」の講義ノート。

吉野作造と早稲田

「大正デモクラシー」期の早稲田大学では専任の教授・講師達のみならず、東大・京大等の大学からも科外講義の講師を招聘していた。ここではそのような講師陣から、吉野作造をとりあげてみたい。

『早稲田学報』1917(大正6)年10月号によれば、「最近支那革命史」の担当講師として吉野作造の名がある。しかし『吉野作造選集』第14巻(岩波書店、1996年)所収の1917年10月23日の日記(以下「吉野日記」と略称)には「夜内ヶ崎君を訪ひて早稲田講師辞退の理由を述べる」とある。吉野の多忙さから、一年ないし半年の講義は困難だったのであろう。早稲田大学教授の内ヶ崎作三郎は吉野の第二高等学校時代以来の親友である。常勤の講師は辞退した吉野だが、内ヶ崎や大山郁夫との交流があり、科外講師としての招聘には応じ、早稲田で講演している。

例えば1918(大正7)年12月3日午後3時より、吉野は早稲田大学大講堂で「国際聯盟論」を講演している。同日の「吉野日記」には「政法学校にて講義を済まし直に早稲田にゆく内ヶ崎君の仲介により科外講義を頼まれ居りしを以てなり 題は「国際聯盟に就て」、聴衆堂に溢れ非常の盛会なりし」とある。早稲田の学生が熱心に聴講した様が見て取れる。

他にも1922(大正11)年5月12日には「支那の近状」を、1923(大正12)年2月1日には「羅馬法王問題」を、1924(大正13)年11月7日には「支那問題」を科外講演している。1922年5月12日の日記には、早稲田の古本屋街を訪問したこと、1924年11月7日の日記には、大隈会館で夕食を饗されたことが記されている。吉野も広い意味に於ける、早稲田大学の教員であり、早稲田の学生も彼の教え子であった。

『建設者同盟綱領』『建設者』第1巻第2号 1922年11月号

早稲田大学図書館所蔵

『建設者』は建設者同盟の機関紙。第1巻第2号の巻末に綱領がのせられている。建設者同盟は和田巖・稲村隆一・浅沼稻次郎ら早稲田大学の学生を中心に1919(大正8)年に結成された、学生思想団体。

早稲田大学
 好のものを、却つて教師かと同様へられるほどの堂々たる二重マント、傘をかついで高足靴を穿いたもの、千懸萬敷服装制度などは、こゝに至つて全くメチヤクメチヤ。

ストーブの誇り

早稲田大学理工科

理科の教員舎は、理工科が獨占して、ここに新天地を開拓してゐる。堂々たる實驗室があるばかりか、舊校舍に對して特に誇るべきはストーブを所有してゐること



だ生徒諸君は御買柄三角や丁字形の定規をひつかつき、辨當を三人前も携へて朝の六時に登校し夜の十時まで都合十一時間をたてつゞけにドローイングルームに立籠り其他強振りは全く天下無類であるが、ドン／＼構はずストーブを焚くやら電燈を點すやらで教務課の方では随分閉口顔音してゐるが勉學の爲に使はれるのだから叱ることもどうすることも出来ないとの語。

ミルクパーチー

早稲田大学園芸

商科は早稲田園一の高標黨、その登校振りは目覚しとも目覚しけれど、門前に到着するや忽ち右向け右、左向け左をして、皆狐鼠々々とミルクホールに消えてしまふ。「人又一人、いつか此處にミルクパーチーなるものが成立して、授業時間が短ると同時に教壇の中の一人を代表者として教室に派遣し専ら講義取りの任に當らしめ、一

ストーブの誇り ミルクパーチー

四一

近藤浩一路『校風漫画』博文館 1917年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

画家・漫画家である近藤浩一路が当時の学生を描いた漫画集。当時の学生の生活がいきいきと表現されている。

絵葉書にみる「大正デモクラシー」期の早稲田大学

個人蔵

絵葉書にみる「大正デモクラシー」期の早稲田大学。正門，大講堂，図書館，政・法教室等各科教室，高等予科。

尾崎士郎『わが青春の町』 河出書房新社 1963年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

『人生劇場』で著名な小説家尾崎士郎の回顧。早稲田界限・鶴巻町についての思い出が記されている。

今和次郎「早稲田附近の各種飲食店—分布状態—」『早稲田学報』1926年6月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵。

早稲田大学理工学部教授で考現学のパイオニア今和次郎による1926(大正15)年当時の早稲田周辺の飲食店調査。洋食店26軒，カフェ7件，喫茶店16件，ミルクホール7件等大学周辺に145軒の飲食店があることが記されている。

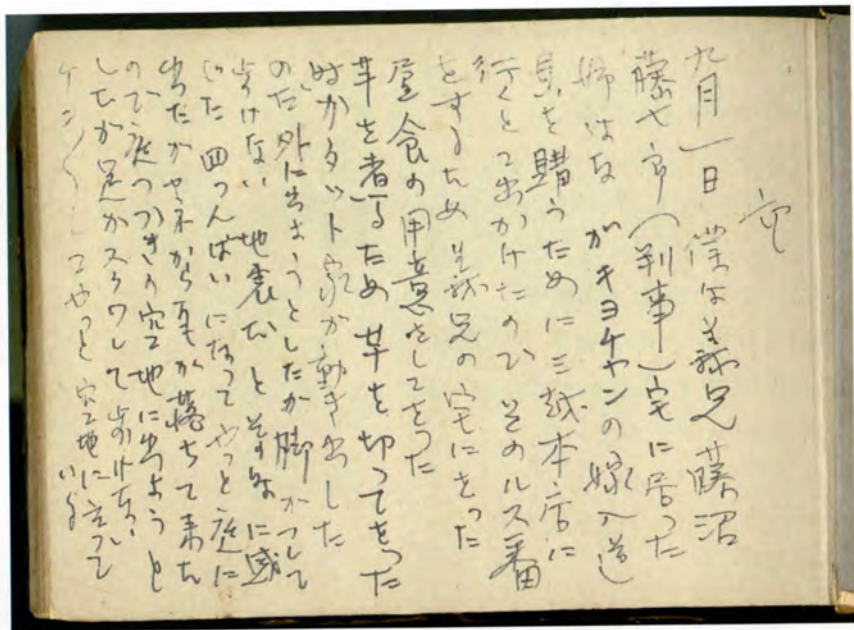


政治経済学科 卒業記念写真帖 1916年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

明治期から始まった卒業アルバムの作成は大正期になるとほぼ全学科（学部）で作成されるようになる。各アルバムとも大隈重信総長、高田学長（総長）、学科長（学部長）、授業の光景そして教授陣、卒業生の写真を掲載している点では共通している。しかし内容は各学部毎に異なる構成となっている。政治経済学科のアルバムには詳細な目次があり、上述の内容以外に前島密筆の早稲田大学教旨、校歌、サークル活動、大隈邸や早稲田界隈の写真等を含む豊富な内容のものとなっている。

上の写真は塩沢昌貞の経済学の講義のもの。



「関東大震災写真帖」

早稲田大学大学史資料センター所蔵

関東大震災時早稲田大学理工学部建築学科に在籍していた一学生がのこした震災当時の写真と手記。

今和次郎「早稲田附近の飲食店分布図」

『早稲田学報』1932年1月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵

1931(昭和6)年に調査された早稲田界隈の飲食店分布図。1926(大正15)年にくらべ、カフェ・喫茶店・レストランが49件から86件に増えるなど学生街のにぎわいが増していることが確認できる。

『新版大東京案内』中央公論社 1929年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

今和次郎編集による1929(昭和4)年当時の東京案内。早稲田大学は「官学に対抗する私学の雄」「東都学生界の覇者」と紹介されている。

『早稲田学報』1923年10月号(大震災臨時号)

早稲田大学図書館所蔵

関東大震災直後の『早稲田学報』。大学における震災の概況、震災初発の状態、被害詳報、教職員・校友の安否等が報じられている。震災の被害と混乱は小さいものではなかったが、10月11日より授業は再開された。

3. あるべき大学像をめぐる—早稲田騒動と軍事研究団事件—

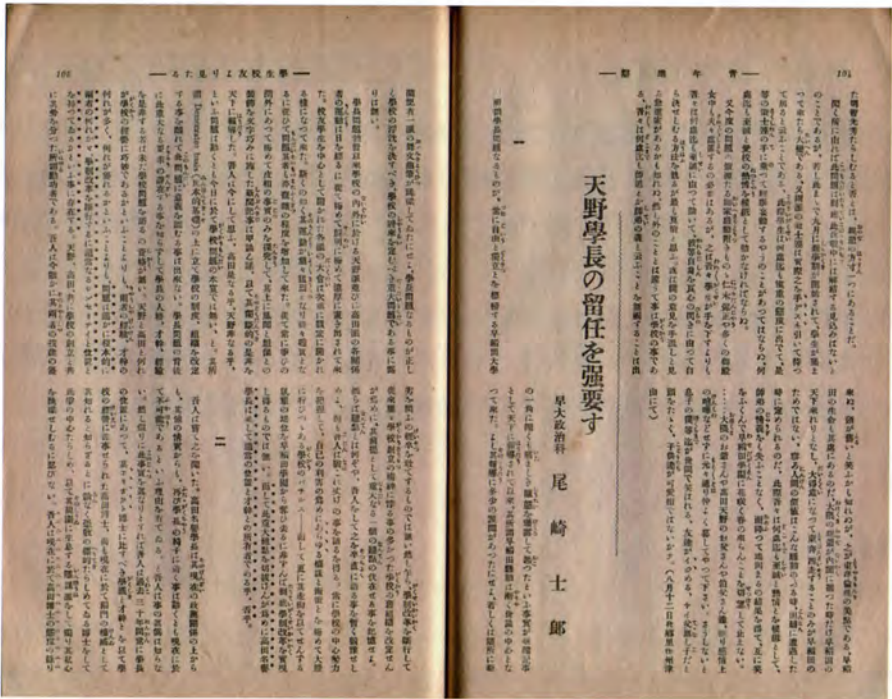
明治期の建学の時代を経て、大正期に大学としての発展の歩みを続ける早稲田大学への愛着は、おそらく総長・学長・維持員といった早稲田大学経営陣、また教員・学生・校友が皆共有するものであったろう。しかし早稲田大学がいかなる形で発展すべきかという問題、即ち将来あるべき早稲田大学の大学像は各人一様ではなく、時にそれは先鋭化した対立となることがあった。1917(大正6)年の早稲田騒動、また1923(大正12)年に起った軍事研究団事件は明らかに大学像の対立という側面を有する事件であった。ここでは早稲田騒動における「高田派」と「天野派」の大学像、また軍事研究団事件において賛成派と反対派が示した大学像を見てみたい。

【展示資料】

『早稲田大学紛擾秘史』第二巻

早稲田大学図書館所蔵

早稲田騒動に関する市島謙吉(春城)の記録。いわゆる「高田派」(高田前学長支持派)の見解を示す基本史料。6月17日の高田邸の会合で市島謙吉が主張したのは大学創業者、経営者として手腕があるとみなされた高田早苗の学長復帰であった。



天野学長の留任を強要す

早大政治科 尾崎士郎

1917年9月9日

尾崎士郎「天野学長の留任を強要す」『青年雄弁』第2巻第9号 1917年9月号

早稲田大学大学史資料センター所蔵

「早大改革号」と題された本雑誌は早稲田騒動に関する教員・評議員・識者・学生の意見を幅広く掲載している。当時政治経済学科に在学していた尾崎士郎は、「民本的基礎」のもとでの大学改革を主張、現任の天野学長の留任と天野学長の下での改革を要求した。

石橋湛山「大正六年の早稲田騒動」『石橋湛山全集』第15巻

早稲田大学大学史資料センター所蔵

騒動当時『東洋経済新報』にあり校友であった石橋湛山の騒動回顧録。石橋は「天野派」として天野学長を支持した。石橋の回顧に依れば、「天野派」の主張は早稲田大学の「民本的」改革であった。

北沢新次郎・末川博・平野義太郎監修『大山郁夫伝』中央公論社 1956年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

早稲田騒動当時教授であった大山郁夫の伝記。騒動当時の大山の行動が説明されている。大山は恩賜館に研究室を有し、大学改革を志向する「恩賜館組」の教授の一人であり、大学改革案を高田に提出し、天野学長への取次ぎを依頼している。騒動の結果、「恩賜館組」の宮島綱男教授が罷免されると、大山は抗議して辞任している。

大浜信泉『総長十二年の歩み』校倉書房 1968年

早稲田大学大学史資料センター所蔵

後の第7代早稲田大学総長で、戦後の大学経営を担った大浜信泉は早稲田騒動当時法科学生。早稲田騒動では教員・校友・学生が対立する中、大浜は弁護士試験を控え学業を優先し武州御嶽の神官の家で法律書を読んでいたという。騒動における学業優先・静観型の学生の対応として興味深い。

「早稲田騒動とは」

1917(大正6)年に起った学長人事と大学改革をめぐる対立。第二次大隈重信内閣に文部大臣として入閣した高田早苗前学長の経営手腕に期待し学長復帰を望む「高田派」と、天野学長の留任と、天野学長のもとでの大学改革を望む「天野派」とに意見が分かれた。最終的には任期満了による天野学長の退任(翌年平沼叔郎が学長就任)、校規の部分改正という形となった。

早稲田大学軍事研究団『我等も国防へ』1924年

早稲田大学図書館所蔵

早稲田大学軍事研究団による軍事研究団設立の趣旨や活動をまとめたもの。冒頭の宣誓文によれば、「国防に当り国体の精華を發揚し国民の使命を達成する」ことは早稲田大学教旨にうたう「模範国民の造就」にかなう事とされ、学業の余暇に軍事を研究する事の必要性を主張している。

若津一夢「早稲田の滅茶苦茶演説会」『雄弁』1923年7月号

早稲田大学図書館所蔵

大日本雄弁会(現講談社)の雑誌『雄弁』による軍事研究団発会式当日を報じた記事。軍事研究団に反対する学生の野次怒号が記録されている。反対派の学生にとって、軍事研究団の容認は軍閥と握手する事であり、早稲田の精神にもとる行為とみなされた。



銅像前で大乱闘を演ず 早大学生大会暴行に終る

早稲田大学大学史資料センター所蔵（複製）

5月12日の学生大会の様相を記した縦横倶楽部会長森伝の原稿。軍事研究団賛成派の学生と雄弁会を中心とする反軍事研究団の学生の激しい対立の様相がわかる。当時雄弁会員であった浅沼稲次郎は反軍事研究団側の雄弁会の中心として奮闘し、この学生大会の対立の中で負傷している。

浅沼稻次郎直筆原稿「早稲田の野党精神」

早稲田大学大学史資料センター所蔵 1960(昭和35)年

日本社会党書記長・委員長をつとめた浅沼稻次郎が1960(昭和35)年に執筆した直筆原稿。日本社会党週紙に早稲田大学在学中の学生社会運動について記されており、軍事研究団事件について詳細に記されている。当時浅沼は雄弁会で活動、軍事研究団に対する反対派として活動した。

「軍事研究団事件とは」

1923(大正12)年5月、青柳篤恒教授を団長とする軍事研究団が軍部の後援を受けて発会した際、その是非をめぐる学生が鋭く対立した事件。雄弁会の学生は同会結成に反対した。5月12日の大隈銅像前での学生大会は軍事研究団の是非をめぐる激しく対立、乱闘の事態となった。結局5月15日、学内の激しい対立を受けて軍事研究団は解散。翌年軍事研究団の側から『我等も国防へ』が刊行され、彼等の会結成の趣旨が説明されている。軍事の研究という行為が、「模範国民」をうたう早稲田大学の趣旨にかなうか否か、という論点での対立でもあった。

【編集・発行】

2013年10月8日

早稲田大学大学史資料センター

Waseda University Archives

〒202-0021 東京都西東京市東伏見 3-4-1
東伏見 STEP22

TEL 042-451-1343 FAX 042-451-1347

URL <http://www.waseda.jp/archives/>

©2013 Waseda University Archives.

不許複製 非売品